

ロールモデル講演会 実施報告書

- 【演題】 患者に寄り添う薬剤師が行う臨床研究、臨床業務の実践
【講師】 錦織 淳美 氏（肥後薬局 薬剤師、Pharm.D.）
【日時】 令和4年11月4日（金） 13:00～14:30
【場所】 岐阜薬科大学 第二講義室
【参加者数】 127名



講師は岐阜薬科大学卒業後、米国フロリダ大学薬学部において臨床薬剤師の学位である Doctor of Pharmacy (Pharm.D.) を取得した。帰国後は、大学病院薬剤部において病棟担当薬剤師業務、学生の教育、執筆活動など、幅広く活躍してきた。また、薬剤師シミュレーション教育や薬薬連携についての研究など、科研費も取得して研究活動も活発に行ってきた。現在は、保険調剤薬局に勤務し、患者応対や調剤業務などのほか、薬局薬剤師としての研究活動も行うための準備をしている。

医療人が行う研究（臨床研究）について、業務中に起きた疑問点を研究テーマとして科研費を獲得した経験をもとに、病院薬剤師としての研究活動について分かりやすく説明していただいた。研究内容と結果、考察を詳しくお話いただき、学生には臨床研究のイメージができたと思われる。続いて、研究活動の1つとして実施した海外視察で得た薬剤師業務と知見についてお話いただいた。個人番号と医療情報が一元化されている国があることや米国の退院後フォローアップシステムなど、日本とは違うシステムが採用されていることなど、興味を持って聞くことができた。



また、大学病院勤務時代に行われた研究成果の一つでもある、保険薬局薬剤師向けのシミュレーション教育の開発について紹介があった。薬剤師だけではなく、栄養士や看護師など多職種と連携して行う訪問医療行為での薬剤師としての技術向上と意識啓発につながっているとのことであった。

薬局薬剤師として働く中で理想とする保険薬局像やそのための問題点、課題を持っており、その一部も紹介していただいた。道のりは容易ではないが将来的には科研費の申請につなげたいとお話された。

最後に、ワーク&ライフバランスおよびそのマネジメントについて、自身が利用したかつての制度



の話や、職場環境の整備や多様性・柔軟性のある業務体系の導入、先輩の助言を得ること、有効な生涯教育システムの確立など、今後の展望についてもお話していただいた。

気力の維持が最も重要だと感じていること、また、研究マインドをもって問題点や疑問点を抽出していくこと、時代の流れを感じるアンテナを

